

活動分野	森に親しむ懇談会（もりこん）138		
タイトル	森林インストラクターにとっての「伝え方」の基本と実際		
実施日時	平成28年8月18日（木）18:45～20:45		
実施場所	船橋市 中央公民館集会室		
受講者	17名	FIC会員	17名

活動の内容

講師は、森林インストラクターの萩埜恵子さん。萩埜さんは、公益財団法人東京動物園協会で、長く、動物解説員として普及活動に携われ、特に、東京都立上野動物園において、子どもたちや来園者に動物園で何を学んでほしいかなどの教育活動に取り組まれてきました。

「もりこん138」では、我々森林インストラクターが、参加者に何かを「伝えよう」とするとき、「必要なこと」、「注意しなければいけないこと」などをテーマに、4つのグループに分かれて検討、発表、意見交換をしました。



1. 「伝える」「伝わる」の基本構造

「自然などの対象物」が「参加者」に直接、感動・感銘・驚き・興味・楽しさ等を作用するのが理想形であるが、自分で十分に感じ取れない参加者のために森林インストラクターを介して伝える。その時、伝わる物は薄まる。インストラクターの感性が薄いともっと薄まる。

一方、知識や情報は、森林インストラクターの研鑽により強く明確に発せられ、多少薄まりながらも参加者に伝わる。しかしながら、その知識や情報も、参加者の心に感動・感銘・驚き・興味・楽しさなどの動機付けが無い場合、すなわち、無感動の状態である場合、知識・情報も参加者の欲求を満たすことなく、参加者は満足に至らない。ときには、話を聞くことが苦痛になることさえもありえる。参加者が感動や情報のよりよい受容体であるためには、事前に、或は、その場で参加者について知り、良い受容体となるための方策を講じることが必要。

2. 参加者を知る

① 参加者の情報（知りたい情報とは）

・年齢・参加の動機・参加の単位・住所・性別・経験・楽しむか学ぶか・体調・食物アレルギー・自然体験度・体力・日頃の趣味・資格・自然観などを知って、対策を講じる。

② 参加者を知る方法

参加者名簿からの情報・参加申込書に質問を織り込む・自己紹介・今何に興味を持っているか・参加者の表情を見る

③ 知り得た情報をどう活用するか

下見の時点での活用・安全確保の上で活用・企画内容の選定・資料の内容や表現・スタッフの構成や割り振り・伝え方の工夫・時間配分

3. 参加者が感度のよい受容体となるために ①安心・安全、②快適、③余裕が必要

①参加者の立っている場所が安全、ひとりにされない。講師に意識を集中させる、②立ち止まって説明、言葉を選ぶ（平易・勧誘言葉）トイレ、食事。予定をこまめに伝える。終了時間を延長しない。③アマチュアは情報を積み重ねプロは情報をそぎ落とす（溢れる情報の提供は参加者に理解することをあきらめさせてしまう）：不安・危険、不快、切迫の状態にさせない。